青年の否定的アイデンティティ選択過程の検討

日原尚吾
（発達心理学研究室）

問題と目的

Erikson は自らの漸成発達理論において青年期の心理社会的危機を第Ⅴ段階「アイデンティティ達成 vs アイデンティティ拡散」とし，アイデンティティ拡散の状態像の中でも，第Ⅲ段階「自主性 vs 罪悪感」の問題の青年期でのあらわれを否定的アイデンティティとした。否定的アイデンティティとは，社会的に忌み嫌われている価値に自ら積極的に関わり，自己の証明として受け入れている状態をあらわす。例えば非行集団に所属したり，自分を価値のない人間と決めつけたりしている状態が否定的アイデンティティである。

否定的アイデンティティに関する研究は，否定的アイデンティティを社会問題の一つとして扱う研究と，発達過程の一部として扱う研究とに大別される。社会問題として扱う研究では，青年非行に結びつくアイデンティティ拡散症候群の内，最も非行に結びつく現象として検討されてきた（福島, 1972, 1979; 遠藤, 1981）。一方発達過程として扱う研究（三好, 2008）の数は非常に少なく，否定的アイデンティティ選択に至る過程について十分に検討されているとは言い難い。

Erikson は否定的アイデンティティを選択する過程について“アイデンティティ危機が，エディプス危機まで到達し，それをさらに越えて信頼の危機にまで達する”(Erikson, 1959 / 2011) 時に，罪悪感を否認しつつ主体性を発揮するために，たとえ肯定的な価値を否定することになろうとも，何者かになろうと全体主義的 (total) に否定的アイデンティティを選択すると述べている。ここでの全体主義 (total) とは「善か悪か」「全てか無か」といった二者択一を迫るような態度のことである (Erikson, 1959 / 2011)。

三好 (2008) は Erikson の記述から，全体主義へ至る要因として，1. 信頼の危機，2. エディプス的危機，3. アイデンティティ危機を指摘した。そして否定的アイデンティティを選択した典型事例として作家の谷崎潤一郎を挙げ，伝記資料から，谷崎に 3 つの要因が存在したことを具体的に示した。しかし Erikson は全体主義 (totality) への突然の移行が人間の普遍的な傾向であることを強調しているため (Erikson, 1959/ 2011), 典型例のみではなく，一般青年を対象にこの理論を適用できるか確認する必要がある。

また三好 (2011) は大学生と若年無業者を対象とし，否定的アイデンティティに影響する要因を探索的に調べた。文章完成法を用いて自己概念を表出させ，若年無業者において記述が全体的に否定的であると結論付けている。ただし三好 (2011) は記述を概観し全体的な傾向を述べたのみで，基準を設定し記述を得点化してはいない。

そこで本研究の目的は，以下の 2 点とする。第一に，自己に関する自由記述の内容を Erikson の記述を参考に分類・得点化し，否定的アイデンティティの程度を測定する。第二に，一般の大学生を対象とし，否定的アイデンティティ選択モデルが当てはまるかどうかを質問紙調査によって検討する。具体的には，アイデンティティの危機と信頼の危機が罪悪感を説明し，罪悪感が全体主義を説明するモデルを検証する（Figure 1 を参照）。なお全体主義的な考え方をするからといって，必ずしも否定的アイデンティティにつながるわけではない。よって，全体主義に陥っている場合にいかなる条件を満たせば否定的アイデンティティに陥るのかについては, Figure 1 とは分けて検討する。

方法

対象者　広島県内の大学生 222 名（男性 78 名，女性 138 名, 不明 6 名）であった。平均年齢は 20.62 歳 (*SD*=1.15) であった。

質問紙構成　①自己に関する自由記述 : 20 個の“私は，…”という文章に対して，自由記述による回答を求めた。②基本的信頼感：三好・大野・内島・若原・大野 (2003) の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) の内「基本的信頼 vs 不信感」に対応する下位尺度 7 項目を 4 件法で回答させた。③アイデンティティ達成：S-ESDS の内「アイデンティティ達成 vs アイデンティティ拡散」に対応する下位尺度 7 項目を 4 件法で回答させた。④罪悪感：大西 (2008) の特性罪悪感尺度の内「精神内的罪悪感」に対応

する下位尺度 7 項目を 5 件法で回答させた。⑤全体主義：三好 (2011) で用いられている全体主義尺度 8 項目を 5 件法で回答させた。

結果

否定的アイデンティティの得点化　20 答法の平均回答数は 17.33 (*SD* = 4.18) であった。まず Kuhn & McPartland (1954) の原法に従い自由記述を合意反応と非合意反応に分類した。合意反応とは客観的にも事実と判定し得る記述である（例：私は人間です）。対して非合意反応は，合意反応と判定できない主観的な記述である（例：私は不器用です）。次に非合意反応に分類された記述を，Erikson の否定的アイデンティティの記述を参考に，肯定カテゴリ，中性カテゴリ，否定カテゴリに分類した。分類の信頼性を検討するため，研究目的を知らない心理学専攻の大学院生 2 名に全記述数 3847 の内の 502 記述 (13%) を分類させた。筆者と各評定者との分類の一致率は十分であった（評定者 A：κ = .82; 評定者 B：κ = .82）ため，残りの記述については全て筆者が分類した。

否定的アイデンティティを得点化する際には，否定カテゴリの記述数の多さに加え，肯定カテゴリの記述数の少なさも考慮する必要がある。本研究では，否定カテゴリの記述数から肯定カテゴリの記述数を引いた値を，否定的アイデンティティ得点とした。得点はほぼ正規分布に従っていた。

否定的アイデンティティ選択モデルの検討　本研究で使用した尺度の得点分布とクロンバックの α 係数を，Table 1 に示す。

Table 1

基礎統計量と信頼性係数

	α 係数	平均値	標準偏差	最大値	最小値
基本的信頼感	.78	18.88	3.58	26.00	7.00
アイデンティティ達成	.71	17.98	3.43	28.00	8.00
罪悪感	.91	15.21	5.95	35.00	7.00
全体主義	.83	23.36	6.07	39.00	10.00
否定的アイデンティティ		1.39	2.57	11.00	-4.00

基本的信頼感とアイデンティティ達成が罪悪感を説明し，罪悪感が全体主義を説明するモデルを検証するため，パス解析を行った。モデル適合度は十分な値であった (CFI=1.00, RMSEA=.00)。結果を Figure 1 に示す。パスは全て 1%水準で有意であった。つまり，罪悪感は基本的信頼感とアイデンティティ達成によって説明され，全体主義は罪悪感によって説明されていた。続いて基本的信頼感，アイデンティティ達成，罪悪感，全体主義を説明変数とし，否定的アイデンティティを目的変数とする重回帰分析を行った。どのような条件のもとで全体主義が否定的アイデンティティに関連するか検討するため，各説明変数と全体主義との交互作用項も投入した。分析の結果，基本的信頼感 (β = -.17, p < .10) の影響が有意傾向であった。そして罪悪感の影響 (β = .23, p < .01) と，アイデンティティ達成および全体主義との交互作用 (β = -.23, p < .05) が有意であった。さらに交互作用の下位検定を行ったところ，アイデンティティ達成高群において全体主義の単純傾斜が負に有意であり (b = -.11, p < .05)，アイデンティティ達成低群において全体主義の単純傾斜が正に有意傾向であった (b = .09, p < .10)。

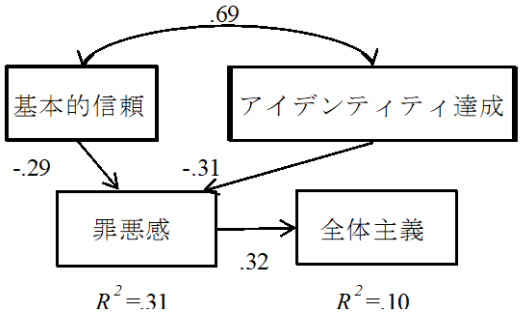

Figure 1. 否定的アイデンティティ選択モデル

考察

否定的アイデンティティ得点はほぼ正規分布に従っていたが，この結果は，否定的アイデンティティを連続量として捉えられる可能性を示唆する。

否定的アイデンティティ選択モデルを検証すると，基本的信頼感とアイデンティティ達成が罪悪感を説明し，罪悪感が全体主義を説明していた。この結果は，基本的信頼の危機に達するほどのアイデンティティ危機が罪悪感を呼び起こし，その罪悪感を否認しつつ主導性を発揮するために全体主義に陥るという，Erikson の理論を支持している。さらに否定的アイデンティティを目的変数とした重回帰分析の結果，基本的信頼感が欠けている者，罪悪感を抱いている者ほど否定的アイデンティティの程度が高かった。これは否定的アイデンティティが深刻な退行状態で起こり，第Ⅲ段階「主導性 vs 罪悪感」の危機と深く関わっていることを反映していると考えられる。また交互作用を検討したところ，全体主義的な考え方をすることが必ずしも否定的アイデンティティにつながらず，アイデンティティ達成度が低い場合にのみ否定的アイデンティティにつながる傾向があることが明らかとなった。